

## 授業評価と教員報告書から見えてくる今後の課題

千田 耕太郎\*      安谷 元伸\*\*      南崎 有香\*\*\*      榊原 和子\*\*\*\*

### Future Issues That can be seen from Class Evaluation and Teacher Reports

Kotaro Senda   Motonobu Yasutani   Yuka Minamizaki   kazuko Sakakibara

四條畷学園短期大学FD委員会では、授業の改善と教育力を高めることを目的に授業アンケートを実施してきた。2017年度よりアンケートの実施方法を変更して2年が経過したので、アンケート結果を分析した。学生による授業評価アンケートは、各質問項目のポイントのヒストグラムが正規分布とならなかったことから、統計的な解析手法は使わずデータを整理・比較し、教員による授業評価アンケート報告書は回答を分類、傾向を探った。その結果、質問内容等について再検討の必要性を認識した。

**Key words:** class evaluation, faculty development

#### 1. はじめに

四條畷学園短期大学では2005年度よりFD委員会を組織し、大学の教育能力を高める目的で、入学時動機調査、授業についてのアンケート、授業についての満足度調査、教員相互による公開授業参観、FD研修会等の取り組みを行ってきた。

授業についてのアンケートに関しては、2005年度のFD運用以前から自己点検自己評価の一環として「学生による授業評価」を実施してきたが、2005年度からは、個々の授業の改善及び学校全体の教育力を高めることを目的に、組織的に取り組まれるようになり、今日まで継続的に実施されている。

授業についてのアンケートの流れは次のとおりである。①FD委員会が計画を起案。②授業担当者が各授業において学生に授業評価アンケートを実施。③FD委員会はそれらを集計し授業担当者へフィードバック。④その結果を受けた授業担当者は報告書を提出。⑤FD委員会はそれをまとめ公開。⑥授業担当者は改善点を確認し次期授業に反

映。⑦FD委員会は改善を加え新たに起案。これを繰り返しPDCAサイクルとすることで、継続して授業が改善されることを意図している。

2005年度から2008年度にかけては、全授業科目を対象に講義科目は16項目、演習科目と実技科目では20項目の質問項目を設定し、マークシート方式で実施した。

2011年度から2014年度にかけては、インターネットを利用した新しいアンケート方法を使用し、スマートフォンやPCから回答できるよう改善した。内容面では、学生自身の取り組み姿勢を問う項目を新設し、教員の取り組み姿勢と授業内容に関する項目を整理し、項目数を10項目に変更した。これにより学生がアンケートに回答する際の負担は軽減された。北村、鍛冶谷、榊原（2017）

2017年度、3度目の改訂にあたっては、FD委員会で学生の授業の満足度を決定づける要素とは何か、総合的に見て良い授業とはどのような授業を指すのか等、議論を重ねた。その結果、授業は到達目標の達成、すなわち学修成果によって評価されるべきではないかとの結論に至った。したがって、学生には授業の到達目標にどの程度達成し、授業時間外学習にどの程度時間を充てたのかを問うことにした。一方教員には、学生のシラバス到達目標の達成状況と、学生の積極的な授業への参

\*      四條畷学園短期大学 保育学科  
\*\*     四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科  
\*\*\*   四條畷学園短期大学 事務室  
\*\*\*\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

加を促す工夫を行ったのかを問うことにした。

また、これまででは期末に実施してきたアンケートからの改善策を学生に反映させることができない等の声を受け、15回の講義期間中の7～8回目に中間アンケートを導入した。このことで教員はアンケートで得た学生の意見や要望をただちに授業に反映させることが可能となった。学生も意見や要望を伝えることにより授業への参加意識が高まるという効果も期待できる。

さらに、これまでの授業評価アンケートが全教科にわたって行っていたため、対象科目を教員が特に課題意識をもっている2科目（非常勤教員は1科目）に絞ることによって、より効率的に授業改善が行われることをねらいとした。そして、学生が同じ選択肢を横並びで選んでいる事例が見受けられたことなどの解消にもつながると期待した。

「教員による自己点検報告書」においても内容を一新し、「授業評価アンケート報告書」として教務情報システムポータルサイト「ユニバーサル・パスポート」を活用することで効率化を図った。

2018年度は、2017年度の方式を踏襲しながら、迅速に活用できるよう各期にFD委員会からの報告書を作成し公開した。

本稿では、新方式による2017年度と2018年度の授業についてのアンケート結果を中間報告としてまとめ、アンケート活動の有効性や問題点、改善点について考察した。

## 2. アンケートの概要

アンケートの対象となる授業科目は、2017年度から2018年度の新設学科短期大学（保育学科、ライフデザイン総合学科）の授業のうち、専任教員は2科目（又は同一科目2クラス）、非常勤教員は1科目（1クラス）を任意で選択した。

### 2.1. 学生による授業評価

#### 中間アンケート

ペーパーによる無記名のアンケート。対象となる授業の7回目または8回目に実施。アンケート項目は以下の3項目である。

問1 「この授業の良い点を具体的に述べて下さい。」(自由記述)

問2 「この授業について改善してほしい点を具体

的に述べて下さい。」(自由記述)

問3 「あなたは、授業中の分からないことや不明な点を質問したり調べたりしましたか。」(4件法)

1. そう思う
2. ややそう思う
3. あまり思わない
4. そう思わない

問1、問2は、授業に対する評価や要望。問3は授業への取り組みに対する自己評価である。提出されたアンケートは担当教員が保管し、翌回以降の授業において学生の意見、要望等をフィードバックし授業改善に活用した。

#### 最終アンケート

スマートフォンかPCで実施するWeb方式、無記名のアンケート。対象となる授業の14回目または15回目に実施。アンケート項目は以下の4項目である。

問1 「中間アンケートで出された学生の意見、要望に対する取り組みは見られましたか。」(4件法)

1. そう思う
2. ややそう思う
3. あまり思わない
4. そう思わない

問2 「この授業は、積極的な参加を促すため工夫（質疑応答、課題の発表、グループワーク、コメントペーパーなど）がされていましたか。」(4件法)

1. そう思う
2. ややそう思う
3. あまり思わない
4. そう思わない

問3 「この授業の予習・復習および課題に当てた時間は、1週間でのどのくらいですか。」(5件法)

1. 3時間以上
2. 2～3時間
3. 1～2時間
4. 30分～1時間
5. 30分未満

問4 「この授業のシラバスに示されている到達目標をどの程度達成できたと思いますか。」(5件法)

1. A (90～100%)
2. B (80～89%)
3. C (70～79%)
4. D (60～69%)
5. E (59%以下)

問1、問2は、授業及び授業担当教員に対する評価。問3、問4は、学生自身の取り組みや学習成果に対する自己評価である。

## 2.2. 教員による授業評価アンケート報告書

学生へのWeb方式授業評価アンケート（最終アンケート）の結果をFD委員会が集計し、Webを通して教員にフィードバックした。なお、集計結果はそれぞれの教員の当該授業科目のみ閲覧できるようにした。その後、教員には授業評価アンケート報告書の作成を依頼し、以下の3項目について全て自由記述で回答を求めた。

問1「この科目（クラス）を今回の授業評価アンケートの対象に選んだ理由について述べて下さい。」

問2「中間アンケートの結果を受けて、授業改善・工夫したことについて述べて下さい。」

問3「授業評価アンケートの結果と学生の成績から見た、シラバスの到達目標の達成状況について述べて下さい（今後の課題も含む）。」

## 3. 結果と考察

前述のとおり、2017年度のアンケート実施要項改定により、アンケート対象授業科目は担当教員の任意で選定されることになったのだが、実際に対象となった授業科目（教員から提出された授業評価アンケート報告書の数）のうち極端に学生のアンケート参加率が低い、あるいはエラーのため集計できない授業を除いた有効な回答数は、2017年度前期が46授業、後期が43授業、2018年度前期が52授業、後期が33授業であった。

対象となった授業科目においては、ライフデザイン総合学科総合福祉コースが募集停止となり、2018年度よりその授業科目は開講されていない。この2年間継続してアンケート対象として選定された授業は、前期が25授業、後期が21授業であった。

### 3.1. 学生による授業評価

ペーパーによる中間アンケートは、実施者が保管しているためWeb方式最終アンケートの分析を行った。

最終アンケートは、学生が4つの設問を4件法または5件法で回答した。北村・鍛冶谷・榊原

（2017）の分析方法と同じように、選択肢の高評価から低評価に向けて4から1、あるいは5から1のポイントに換算し、授業ごとの平均ポイントとアンケート実施全授業の平均ポイントを算出し比較した。なおこれ以降、単位として使用する場合はポイントをptと表記する。

2017年度と2018年度の経年比較については、各項目のポイントのヒストグラムが正規分布を示していないことから、統計的な解析手法による分析は難しいと判断した。また、ノンパラメトリック検定による分析も検討したが、データの持つ要素が異なる年度、異なる授業、異なる学生など複雑であるため、分析結果の妥当性が判断できないことから、今回は統計的な分析よりもデータ整理と比較を中心に進めた。（図1～4、2017年度前期・後期ヒストグラム群及び2018年度前期・後期ヒストグラム群）。

アンケートは常勤、非常勤を問わず全教員に対して行うこととしているが、前期の方が後期よりデータ数が多くなる傾向が見られる。

質問項目1「中間アンケートで出された学生の意見、要望に対する取り組みは見られましたか。」、質問項目2「この授業は、積極的な参加を促すため工夫（質疑応答、課題の発表、グループワーク、コメントペーパーなど）がされていきましたか。」については、2017年度、2018年度の前期は、数値的な差異が低い結果が得られた。2017年度、2018年度の後期は、最大値、最小値と標準偏差に差異が見られるが、平均値、中央値についてはほぼ同じ値であった。

質問項目3「この授業の予習・復習および課題に当てた時間は、1週間でのどのくらいですか。」については、2017年度、2018年度の前期・後期共に標準偏差が他の質問項目よりも大きくなる傾向が見られ、最小値も他の質問項目より低い傾向が見られた。数値データにバラツキが大きく、質問内容等の再検討の必要性も考えられることから、今後の検討課題とした。

質問項目4「この授業のシラバスに示されている到達目標をどの程度達成できたと思いますか。」

この設問は、今回の授業評価アンケート改定の大きな変更点の一つであり、従来の授業の満足度を問う内容から、授業の到達目標の達成度を問うこととした。

2017前 質問1		2017前 質問2		2017前 質問3		2017前 質問4	
データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度
1	0	1	0	1	0	1	0
1.2	0	1.2	0	1.2	0	1.2	0
1.4	0	1.4	0	1.4	0	1.4	0
1.6	0	1.6	0	1.6	5	1.6	0
1.8	0	1.8	0	1.8	8	1.8	0
2	0	2	0	2	13	2	0
2.2	0	2.2	0	2.2	4	2.2	0
2.4	0	2.4	0	2.4	3	2.4	0
2.6	1	2.6	0	2.6	8	2.6	0
2.8	1	2.8	1	2.8	1	2.8	1
3	6	3	8	3	1	3	4
3.2	16	3.2	12	3.2	1	3.2	3
3.4	14	3.4	7	3.4	0	3.4	5
3.6	4	3.6	14	3.6	2	3.6	11
3.8	3	3.8	3	3.8	0	3.8	13
4	1	4	1	4	0	4	6
	46		46	4.2	0	4.2	2
				4.4	0	4.4	0
				4.6	0	4.6	1
				4.8	0	4.8	0
				5	0	5	0
				46			46

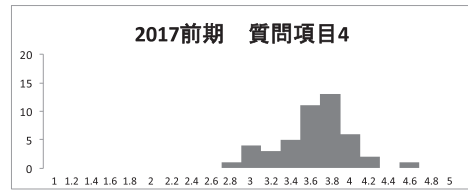
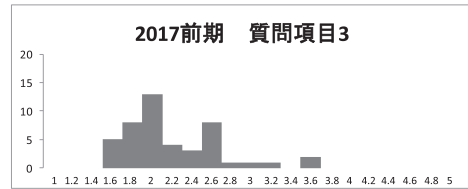
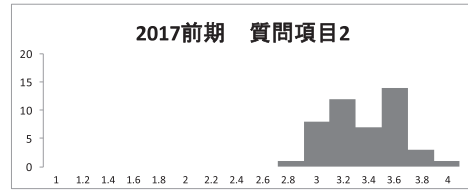
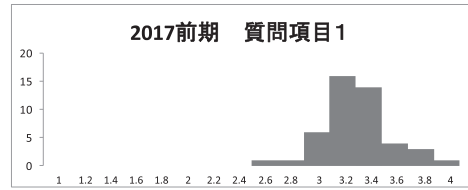


図 1

2017後 質問1		2017後 質問2		2017後 質問3		2017後 質問4	
データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度
1	0	1	0	1	0	1	0
1.2	0	1.2	0	1.2	2	1.2	0
1.4	0	1.4	0	1.4	3	1.4	0
1.6	0	1.6	0	1.6	2	1.6	0
1.8	0	1.8	0	1.8	6	1.8	0
2	0	2	2	2	8	2	0
2.2	2	2.2	0	2.2	8	2.2	0
2.4	0	2.4	1	2.4	6	2.4	2
2.6	1	2.6	0	2.6	1	2.6	0
2.8	0	2.8	0	2.8	1	2.8	0
3	4	3	6	3	4	3	2
3.2	5	3.2	3	3.2	1	3.2	0
3.4	17	3.4	13	3.4	1	3.4	4
3.6	9	3.6	10	3.6	0	3.6	2
3.8	5	3.8	8	3.8	1	3.8	3
4	4	4	4	4	0	4	13
	47		47	4.2	0	4.2	10
				4.4	0	4.4	7
				4.6	0	4.6	1
				4.8	0	4.8	0
				5	3	5	3
				47			47

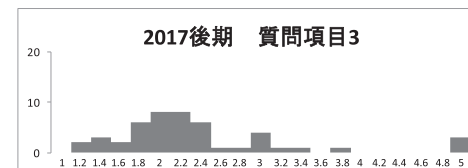
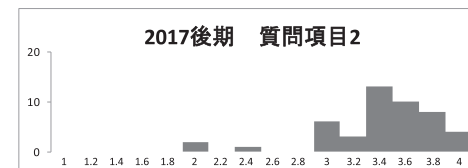


図 2

2018前 質問1		2018前 質問2		2018前 質問3		2018前 質問4	
データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度
1	0	1	0	1	0	1	0
1.2	0	1.2	0	1.2	1	1.2	0
1.4	0	1.4	0	1.4	0	1.4	0
1.6	0	1.6	0	1.6	9	1.6	0
1.8	0	1.8	0	1.8	8	1.8	0
2	0	2	0	2	10	2	0
2.2	0	2.2	0	2.2	6	2.2	0
2.4	0	2.4	0	2.4	5	2.4	0
2.6	2	2.6	2	2.6	5	2.6	0
2.8	7	2.8	7	2.8	2	2.8	1
3	11	3	7	3	1	3	1
3.2	10	3.2	11	3.2	4	3.2	5
3.4	9	3.4	9	3.4	0	3.4	10
3.6	8	3.6	7	3.6	0	3.6	8
3.8	5	3.8	7	3.8	1	3.8	6
4	0	4	2	4	0	4	11
	52		52	4.2	0	4.2	4
				4.4	0	4.4	3
				4.6	0	4.6	1
				4.8	0	4.8	2
				5	0	5	0
					52		

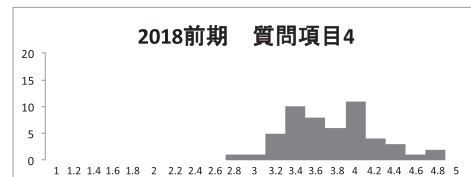
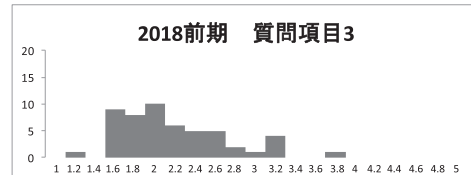
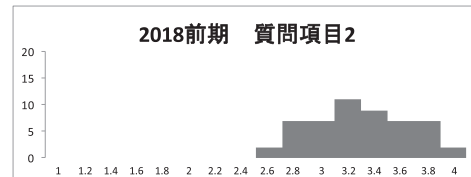
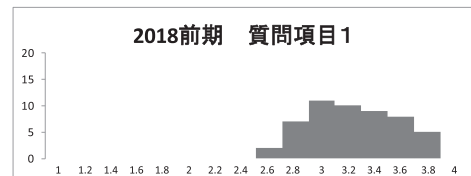


図3

2018後 質問1		2018後 質問2		2018後 質問3		2018後 質問4	
データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度	データ区間	頻度
1	1	1	1	1	1	1	1
1.2	0	1.2	0	1.2	0	1.2	0
1.4	0	1.4	0	1.4	2	1.4	0
1.6	0	1.6	0	1.6	4	1.6	0
1.8	0	1.8	0	1.8	5	1.8	0
2	0	2	0	2	9	2	0
2.2	0	2.2	0	2.2	4	2.2	0
2.4	0	2.4	0	2.4	5	2.4	0
2.6	3	2.6	2	2.6	3	2.6	0
2.8	1	2.8	0	2.8	2	2.8	0
3	1	3	2	3	3	3	3
3.2	7	3.2	8	3.2	0	3.2	2
3.4	13	3.4	15	3.4	0	3.4	1
3.6	8	3.6	5	3.6	0	3.6	1
3.8	4	3.8	2	3.8	0	3.8	10
4	0	4	3	4	0	4	9
	38		38	4.2	0	4.2	4
				4.4	0	4.4	3
				4.6	0	4.6	4
				4.8	0	4.8	0
				5	0	5	0
					38		38

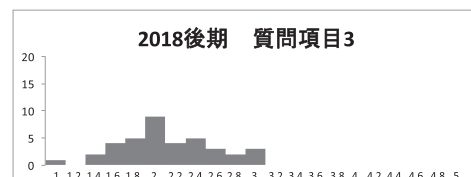


図4

2017年度前期のアンケート実施全授業の平均ポイントは3.5pt。最高ポイントは4.5pt、最低ポイントは2.8ptであった。2017年度後期の全授業の平均ポイントは3.9pt。最高ポイントは5pt、最低ポイントは2.4ptであった。同じく2018年度前期実施全授業の平均ポイントは3.7pt。最高ポイントは4.8pt、最低ポイントは2.7ptであった。2018年度後期の全授業の平均ポイントは3.8pt。最高ポイントは4.6pt、最低ポイントは3.0ptであった。

また、アンケート対象全授業の平均ポイントの推移は、前期は若干のアップ、後期は横ばいと見えるが、各教員がアンケート対象に選定した授業科目が年度、期によって若干異なるため、この数は全体の傾向としての参考的な数値としか見ることができない。そこで、2年間にわたり継続してアンケート対象に選ばれている授業のみピックアップし平均ポイントを求めた結果、前期は3.5pt→3.8pt、後期は3.8pt→3.8ptとなり、実施全授業の平均ポイントの推移とほぼ同様な傾向となり、違いは見出せなかった。

### 3.2. 教員による授業評価アンケート報告書

2011年度から2014年度までの報告書の分析に、北村、鍛冶谷、榊原（2017）は、樋口（2014）が開発したフリーソフト「KH Coder」を使用し、テキストマイニングを行った。

しかし今回のアンケート調査では、対象となる授業科目数を大幅に削減した。日和（2013）が、「データ数によっては、元のテキストデータを丁

寧に読むことによってより深く理解することができるかもしれない。」<sup>1)</sup>と述べているように、解析するテキストデータが少ないことからテキストマイニングは効果が少ないと判断し、回答を分類することによって授業や学生に対する教員の意識や問題とするところの傾向を探った。

問1「この科目（クラス）を今回の授業評価アンケートの対象に選んだ理由について述べて下さい。」回答は大まかに以下の4種に分類された。

ア. 学生の意識や実態を知りたいから

学生の理解度の確認と積極性について知りたい。少人数できめ細かい授業を行えるので、その効果を確かめたい。授業準備により力を入れている科目だから。指導が難しいと感じているから。一日の最初の授業で自分も不安と緊張が入り混じっているので、良くない点が顕著に表れると思ったから。

イ. 授業の形態や条件がアンケートに適しているから

単独で担当する授業だから。学年全員が履修する授業だから。受講人数が最も多い授業だから。授業に集中し、進めやすい雰囲気クラスだから。アンケートに正しく答えてくれそうなクラスだから。

ウ. 担当する同一授業科目との比較のため

同一科目で複数クラス担当しているのでその比較のため。集中力が高いクラスと私語が多いクラスの比較のため。毎年担当する授業で年度ごとの比較ができる。

表1 アンケート

2017年度 前期

	質問項目1	質問項目2	質問項目3	質問項目4
平均値	3.2	3.3	2.1	3.5
中央値	3.2	3.3	2.0	3.6
最大値	3.9	3.9	3.5	4.5
最小値	2.6	2.7	1.5	2.8
標準偏差	0.262046	0.252579	0.476163	0.345125
データ数	46	46	46	46

2017年度 後期

	質問項目1	質問項目2	質問項目3	質問項目4
平均値	3.3	3.3	2.3	3.9
中央値	3.4	3.3	2.1	4.0
最大値	4.0	4.0	5.0	5.0
最小値	2.1	1.9	1.2	2.4
標準偏差	0.364774	0.400247	0.825858	0.489574
データ数	43	43	43	43

2018年度 前期

	質問項目1	質問項目2	質問項目3	質問項目4
平均値	3.1	3.2	2.1	3.7
中央値	3.2	3.2	2.0	3.7
最大値	3.8	3.9	3.6	4.8
最小値	2.5	2.6	1.2	2.7
標準偏差	0.330664	0.353489	0.523201	0.447432
データ数	52	52	52	52

2018年度 後期

	質問項目1	質問項目2	質問項目3	質問項目4
平均値	3.3	3.3	2.1	3.8
中央値	3.3	3.3	2.0	3.9
最大値	3.8	4.0	3.0	4.6
最小値	2.5	2.5	1.4	3.0
標準偏差	0.293286	0.278828	0.414693	0.409603
データ数	33	33	33	33



エ. 担当授業科目がこの授業だけ  
オ. 特にない

ウ. 特にない  
授業改善に関する要望は出なかった。

回答の分類については、その割合を表2にまとめた。

回答の割合については、表3にまとめた。

表2の分類傾向から、教員はこのアンケートの取り組みにおいて学生の意識や実態をつかむことに主眼を置いていることがうかがえた。

結果を見ると、85%以上の教員が授業環境や授業内容について、改善に取り組んだことを示している。ウ. の「特にない」に分類される答えを見ると、ほとんどが、「授業改善の要望は出なかった」という回答であったが、中には、「どこを勉強しているのかわからない。勉強の仕方を教えてほしい。という要望もあったが、学生がこの授業を履修し単位を修得するために必要な授業内容なので、少々難しくてもあえて改善・工夫はしていない。」という意の回答もあった。この設問の回答の中では、「先生が早口」、「板書をゆっくりしてほしい」、「ゆっくり説明してほしい」等、授業スピードが速いという学生からの要望を記述している教員も見られ、2017年度前期が46授業中13授業、後期が43授業中9授業、2018年度前期が52授業中17授業、後期が33授業中8授業であった。

問2「中間アンケートの結果を受けて、授業改善・工夫したことについて述べて下さい。」

これも回答を大まかに分類した。

2年間でアンケート対象授業の約27%の授業科

ア. 授業環境についての改善に関すること

学生の私語に関すること。空調に関すること。座席に関すること。板書や視聴覚教材の見やすさに関すること。

イ. 授業内容についての改善に関すること

授業スピードに関すること。わかりやすさの工夫に関すること。学生の授業参加についての工夫に関すること。

表2 教員による授業評価アンケート報告書 問1 回答分類表

問1「この科目（クラス）を今回の授業評価アンケートの対象に選んだ理由について述べて下さい。」				
回答の分類	2017年度		2018年度	
	前期	後期	前期	後期
ア. 学生の意識や実態を知りたい	51.7%	51.1%	39.2%	43.2%
イ. 授業の形態や条件がアンケートに適している	15.5%	22.2%	26.6%	4.5%
ウ. 担当する同一授業科目の比較のため	15.5%	4.4%	17.7%	29.5%
エ. 担当授業科目がこの授業だけ	13.8%	20.0%	10.1%	22.7%
オ. 特にない	3.4%	2.2%	6.3%	0.0%

表3 教員による授業評価アンケート報告書 問2 回答分類表

問2「中間アンケートの結果を受けて、授業改善・工夫したことについて述べて下さい。」				
回答の分類 \ 期	2017		2018	
	前期	後期	前期	後期
ア. 授業環境についての改善	4.5%	14.8%	10.2%	23.3%
イ. 授業内容についての改善	91.0%	72.2%	83.0%	62.7%
ウ. 特にない	4.5%	13.0%	6.8%	14.0%

目にそのような要望があがっていたことになる。北村・鍛冶谷・柳原（2017）も2011年度から2014年度までの授業に関するアンケートの分析の中で、授業評価低群のコメントを分析し、学生が板書をノートに書くことへ抵抗を感じていることや、板書量が多いと指摘していることを述べ、学生が書き取ることに気を取られ教員の話聞く余裕がなく授業についていけない可能性を示唆している。

問3「授業評価アンケートの結果と学生の成績から見た、シラバスの到達目標の達成状況について述べて下さい（今後の課題も含む）。」

回答は以下のように分類された。

- ア. 学生の到達目標達成度自己評価についての感想や意見
- イ. 実際の到達目標達成状況や成績についての感想や意見
- ウ. 学生の到達目標達成度自己評価と実際の到達目標達成状況や成績との比較
- エ. 授業についての今後の課題や改善策
- オ. 実際に行った授業内容について
- カ. 授業時間外学修についての感想や意見
- キ. 中間アンケート後の授業改善に対する学生評価についての感想や意見
- ク. アンケート活動についての感想や意見
- ケ. その他

なお、この設問の回答の多くが複数の内容を含んでいたため、それぞれカウントし、百分率ではなく件数で表4にまとめた。

この設問の回答が多岐にわたっていたことには2つの理由が考えられる。

1つめの理由は、設問1、設問2がアンケート対象授業に関する設問であり、設問3が唯一学生による最終アンケート結果に対するレスポンスが可能な設問であったため、幅広い回答となった。

2つ目の理由は、設問1の文章が「この科目（クラス）を今回の授業評価アンケートの対象に選んだ理由について述べて下さい。」、設問2の文章が「中間アンケートの結果を受けて、授業改善・工夫したことについて述べて下さい。」と、ピンポイントに絞った文章であるのに対し、設問3は「授業評価アンケートの結果と学生の成績から見た、シラバスの到達目標の達成状況について述べて下さい（今後の課題も含む）。」と、複数の要素（アンケートの結果、学生の成績、シラバスの到達目標の達成状況、今後の課題）を含んでいたため、この設問を自由記述のように捉えられてしまい、質問内容とはかけ離れた回答も散見されたと考える。

FD委員会では、そのような回答が出てくることもある程度予想をしていた。しかし、教員から忌憚のない意見を得るため、質問内容を選択肢から

表4 教員による授業評価アンケート報告書 問3 回答分類表

回答の分類 \ 期	2017		2018	
	前期	後期	前期	後期
ア. 学生の到達目標達成度自己評価についての感想や意見	9	5	8	11
イ. 実際の到達目標達成状況や成績についての感想や意見	14	18	13	12
ウ. 学生の到達目標達成度自己評価と実際の到達目標達成状況や成績との比較	19	10	19	6
エ. 授業についての今後の課題や改善策	17	14	29	20
オ. 実際に行った授業内容について	2	13	14	10
カ. 授業時間外学修についての感想や意見	17	3	13	3
キ. 中間アンケート後の授業改善に対する学生評価についての感想や意見	1	1	7	5
ク. アンケート活動についての感想や意見	2	2	0	0
ケ. その他	4	2	0	0



表5 教員による授業評価アンケート報告書 問3 回答ウ.の内訳

ウ. 学生の到達目標達成度自己評価と実際の到達目標達成状況や成績との比較				
教員の回答 \ 期	2017		2018	
	前期	後期	前期	後期
A. 学生の自己評価と実際の成績・到達度はほぼ一致していた	8	9	13	3
B. 学生の自己評価と実際の成績・到達度には乖離があった	11	1	6	3

の択一ではなく、あえて自由記述による回答を求めることにしたのである。

設問3の回答のうち、[ウ]の分類を、A.「学生の自己評価と実際の成績・到達度はほぼ一致していた」と、B.「学生の自己評価と実際の成績・到達度には乖離があった」にさらに分類し、内訳を調べた(表5)。

これらの結果からは、年度、期によって結果に差があり、学生が客観的に自分の到達度を評価しているかどうかについて現時点では判断が難しかった。時間外学修については2017年度、2018年度とも前期がそれに関する回答数が多く、教員の関心が高かった。

#### まとめ

2017年度に改定された授業に関するアンケート活動が2年を経過した。アンケート結果を分析し、3年間経過後(2020年度)の改定がより学生の学修に資することを目的に中間評価を行った。

学生による授業評価アンケートは、ヒストグラムが正規分布を示していないこと、データ要素が複雑で分析結果の妥当性が判断できないことから、統計的な分析をやめ、データの比較をした。質問項目3について、標準偏差が他の質問項目よりも大きく、最小値が低い傾向が見られた。また数値データにバラツキが大きく、質問内容等の再検討の必要性から今後の検討課題とした。質問項目4については、経年推移からも明らかな傾向が認められなかった。

教員による授業評価アンケート報告書については、回答を分類ごとにまとめた。

85%を超える教員が授業環境や授業内容についての改善を行ったことがうかがえたが、約27%の授業科目で、授業スピードに関する要望が出てお

り、今後の課題とした。

次年度以降、データを収集して考察を進め、更なる授業改善に活用できるアンケートとしていく。

#### 引用文献

1) 日和 恭世 (2013). ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察 評論・社会科学 = Social science review 0286-2840 同志社大学社会学会 106 p149

#### 参考文献

1) 鍛冶谷 静,北村 瑞穂,金津 春江,榊原 和子 (2016). 教員相互による公開授業参観の成果と課題:授業担当者及び参観者による報告書のテキストマイニング分析を通して 四條畷学園短期大学紀要 四條畷学園短期大学 49号

2) 北村 瑞穂,鍛冶谷 静,榊原 和子 (2017). 授業アンケート結果に対する教員の受け止めと課題:授業評価の推移と教員による自己点検報告書の分析 四條畷学園短期大学紀要 四條畷学園短期大学 50号

3) 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して (KH Coder Index Page <http://khc.sourceforge.net/>)

—2019.9.24受稿、2019.9.26受理—